＃子育て処方せん

下腹部に「こぶ」手術も

子どもがかかりやすい病気や障害について福岡市立こども病院の医師に原因や治療法などを聞く「＃子育て処方せん」。今回は、下腹部にこぶのような膨らみが見つかる鼠径ヘルニアについて、小児外科長の林田真医師に聞いた。

鼠径ヘルニア

鼠径ヘルニアは、腹部の臓器を包む腹膜が筋肉の隙間から外に飛び出し、そのポケット状の部分に臓器が入ることで起きる。加齢などでおなかの筋肉が弱くなって発症する内鼠径ヘルニアは、中高年の患者が目立つ。一方、乳幼児に多いのは外鼠径ヘルニアだ。

生殖器などがつくられる過程で腹膜が皮膚と筋肉の間の空間に飛び出し、そこへ腸が入ったり出たりする。ポケット状の部分は通常、出生前後になくなるが、生まれた子どもの数％には残る。

泣いて腹圧がかかった時などにぽっこりとこぶのようなものが見えるため、発見しやすい病気だ。本人に痛みなどの自覚症状がないこともあるが、ポケットの入り口部分が狭いと、腸が締め付けられて血行障害を起こすケースもある。締め付けがひどい場合には腸が元の場所に戻らなくなる嵌頓という状態に陥る。激痛を伴い、腸閉塞や、腸管の壊死にもつながる。

自然にポケットがふさがることもあるが、生後6か月を過ぎるとその可能性は極めて低くなるため、手術で治すことになる。皮膚を切開してポケットの入り口を縛り、腸などが入ってこないようにするほか、おなかに開けた小さな穴から腹腔鏡を入れて、体内から治す手術法も確立されている。当院では傷痕が残りにくいことなどから、後者を選ぶことが多い。

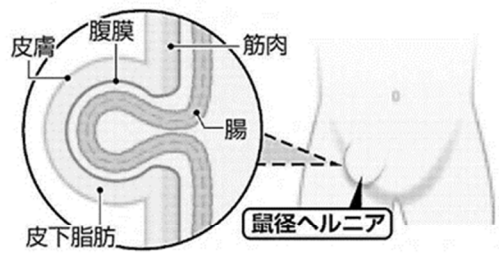
早ければ生後6か月で全身麻酔を使った手術をする。保護者らに説明すると大変驚き、手術室に入る前に涙を流されることもある。ただ、成功率は非常に高く、一度治してしまえば後遺症も少ない病気だ。家族らの気持ちに寄り添い、事前の説明などを丁寧に行うよう心がけている。

（聞き手・大森祐輔）

林田真医師

傷痕残りにくい腹腔鏡も可能

鼠径ヘルニアのイメージ



軽量通学かばんで負担減

山口・防府市が無償配布

小学生が登下校時に重いランドセルを背負い続け、肩や腰の痛み、ストレスを感じる「ランドセル症候群」が問題となっている。軽量な通学用かばんを無償配布する自治体もある。

5月下旬、山口県防府市立富海小中学校では、児童が通学用かばんを背負い、登校していた＝写真＝。ポリエステル製のかばんは重さ920グラムで、1.2キロ前後ある革のランドセルより軽い。体の前で留められる胸ベルトがあり、肩への荷重も分散される。2023年度から新小学1年がいる家庭に配布。「軽くて使いやすい」と児童や保護者の評価も高い。

問題を啓発してきた大正大の白土健副学長によると、以前の調査では教科書などを入れた8キロものランドセルを背負い登下校する例もあった。成長への影響を懸念する声が全国的に広がり、教科書などを学校に置いたまま下校させる「置き勉」を容認する動きが広がった。ただ、近年も英語教育の必修化や教科書・副教材の大型化で、ランドセルの重さは「高止まり」しているという。

白土副学長は「ランドセルが過剰に重いと通学をゆううつに感じるようにもなる」と指摘し、胸バンドを付けるといった負担軽減策を取るよう推奨している。

「＃ 子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はQRコードを読み込んでください